

日本福音ルーテル教会 女性会連盟 第 23 期 156 号

会報



総主題「共にいてくださる主を信じて」
副主題 信仰と、希望と、愛

2018. 4. 15

発行 日本福音ルーテル
教会女性会連盟
〒169-0072 東京都新宿区
大久保 1-14-14
発行者 芳賀 美江
編集者 柳井 悦子
印刷 平山印刷出版

主題聖句

「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」

コリントの信徒への手紙一 13 章 13 節

あなたへ

希望



八幡教会
門司教会 牧師 岩切雄太

波文庫。

女性会連盟から「希望」というテーマで文章を依頼されて2ヶ月間、「希望ってなんだろう？」という問いがことあるごとに頭をよぎつてきました。というのも、「希望」という言葉の辞書的な意味(ある物事の事実を願望望むこと・将来によせる期待)はもちろん分かるのですが、なんだか腑に落ちない気持ちになってしまふからです。

「希望」という言葉をくり返し記しているパウロの手紙を見ると、辞書的な意味の「希望」とは趣きが異なっているように思えます。例えば、「希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和でああなたがたを満たし、聖霊の力によつて希望に満ちあふれさせてくださるように」(ローマの信徒への手紙15章13節)。

ところで、「幸福論」の著者であるアラランは次のように言っています。「希望は、希望が生まれる前に信仰を想定し、希望のあとから慈愛が生まれることを想定している」(神谷幹夫訳「定義集」岩

私たちが「希望が叶った」「希望通りになった」という場合の「希望」は、「私のV希望が叶った」「私のV希望通りになった」であり、希望の持ち手の存在が露になっていきます。これに対して、パウロの描く「希望」は、希望の持ち手の存在がおぼろげです。もしかしたら私たちは、「私のV望むこと」だけを照準にした「希望」からすこし距離を置く必要があるのかもしれませんが、「私のV望むこと」だけを照準にした「希望」は、ただ自分の願望(思い)を相手に押しつけることになってしまい、「信仰」や「愛」から遠ざかってしまうからです。

「私のV望むこと」から「私のVが後退した」希望があらわれるためには、私たちが、神として他者を信頼する中で、自分に与えられたことそれ自体を楽しむ(喜ぶ)というふるまいが必要なのではないでしょうか。そう、自分を「かっこ」に入れて他者が主役になる関わりを「愛」と呼ぶように。